

武蔵野日曜聖書講筵 聖霊降臨節祈禱会

使徒的信仰

――コリント後書第12章1～12節――

1980年5月25日

小池辰雄

集会を始めて40年 鴻大なる福音 ギリギリの現実 無力の宣言 十字架で聖霊を受けている
世界が第三の天 図太い魂 使徒の徴 気がつくだけの話 祈り (参考)『無者キリスト』を
読む(キリスト新聞の社説 1976年2月7日 武藤富雄)

【コリント後12】

1 わが誇るは益なしと雖も止むを得ざるなり、茲に主の顕示と黙示とに及ばん。
2 我はキリストにある一人の人を知る。この人、十四年前に第三の天にまで取去られたり(肉体にてか、われ知らず、肉体を離れてか、われ知らず、神しり給う)。
3 われ斯くのごとき人を知る(肉体にてか、肉体の外にてか、われ知らず、神しり給う)。
4 かれパラダイスに取去られて、言い得ざる言、人の語るまじき言を聞けり。
5 われ斯くのごとき人のために誇らん、されど我が為には弱き事のほか誇るまじ。
6 もし自ら誇るとも我が言うところ誠実なれば、愚なる者とならじ。
7 われど之を罷めん。恐らくは人の我を見われに聞くところにて過ぎて、我を思うことあらん。
8 我は我が蒙りたる黙示の鴻大なるによりて高ぶることのなからん為に、肉体に一つの刺を与えらる、即ち高ぶることなからん為に我を撃つサタンの使なり。
9 われ之がために三度まで之を去らしめ給わんことを主に求めたるに、
10 『わが恩恵なんじに足れり、わが能力は弱きうちに全うせらるればなり』
11 『さればキリストの能力の我を庇わんために、寧ろ大に喜びて我が微弱を誇らん。』
12 この故に我はキリストの為に微弱・恥辱・艱難・迫害・苦難に遭うことを喜ぶ、そは我よわき時に強ければなり。

11 われ汝らに強いられて愚になれり、我は汝らに誉めらるべかりしなり。我は数うるに足らぬ者なれども、何事にもかの大使徒たちに劣らざりしなり。
12 我は微と不思議と能力ある業とを行ひ、大なる忍耐を用いて汝等のうちに使徒の徴をなせり。



●集会を始めて40年

集会を始めたのは1940年ですから、1980年で40年。とにかく私は集会を続けてきました。モーセの荒野の旅が40年。「40」という数は面白いね、キリストが断食されたのが40日。「4」という数は「3」と違って、これは苦難を意味するらしい。

四角は十字架になる。三角は幕屋。三位一体。私は「四位一体」ということもいう、「神・キリスト・聖霊・我」

と。「三位一体」と言ったって、ただそれを眺めていたのではしょうがない。自分がその中に入らなくては。

「三位一体の中に我が一如になる」

というのが「四位一体」ということです。「四位一体」なんていうことをまだ誰も言わない。私の神学には出てくるから。なにさまどうも、聖霊の世界はありがたいです。

「わが誇るは益なしと雖も止むを得ざるなり、茲に主の顕示と黙示とに及ばん。」

と、パウロは。なぜ、そんなことをパウロは言い出したかというと、それは11章の23節以下に書いてある。

「²³彼らキリストの役者なるか、われ狂える如く言う、我はなお勝れり。わが労は更におおく、獄に入れられしこと更に多く、鞭うたれしこと更に夥しく、死に瀕みたりしこと屢次なりき。云々」(コリント後12・23)

と、このことなんです。

「それらのことを、仕方がない、やむをえず私はそんなことを言った。これだけの苦難に自分は貫いてきた。それを言わざるを得ない」

と。けれども、彼は自分の力で貫いたとは、もちろん思っていない。また、これからまた言おうとしているところの、即ち第三の天の体験。霊的なもの凄い次元の体験です。

「肉体でか、肉体を離れてか、知らん」

という。

²我はキリストにある一人の人を知る。この人、十四年前に第三の天にまで取去られたり(肉体にてか、われ知らず、肉体を離れてか、われ知らず、神しり給う)

³われ斯くのごとき人を知る(肉体にてか、肉体の外にてか、われ知らず、神しり給う)

という。碧巖録の中にも非常に不思議なことが書いてあるのがありますが、今日はその話ではありませんけれども。いわゆる

「ドッペルゲンガー」[Doppelgänger 生霊、分身]

という。霊の我と肉の我とが離れて、そしてまたそれが一緒になるような体験です。

しかし、それはキリストが荒野の試みをされた時にも、やはりそのようなことです。



「山の頂きに行った」

とか、

「宮の上に行った」

とか。あれはみな霊の現実でね、エゼキエル書の枯骨の復活もみんなそうです。

4 かれパラダイスに取去られて、^{ことば}言い得ざる言、人の語るまじき言を聞けり。
それは天使の言葉、異言の世界、全く霊言の世界です。

今までそういう異言の高次なのは、いつかもお話した通り――私は今も持っているけれども――梅村君と3、4人で祈った時に――あの時の二人はもうどこかへ行ってしまった――梅村君と私だけになってしまった。梅村が異言の高次なところに来ていたから、

「君、その異言は凄いね、書いてごらん」

と言ったら、彼はアラビア文字みたいなものをグングン書いた。本当に、もの書く人という、彼自身が何を書いてるか知らない。手が自然に動くんです。それだから、これはどこの文字でもない。ただ形を見てると、正にアラビア文字みたい。アラビア文字は右から左に書きますけれども、梅村君はその時は左から右へ書いていた。それで、

「訳してごらん」

と言ったら、訳した。天界に於けるパウロの呻き、キリストの涙、怒りです。

「日本は亡びる。世界も危ない。今、悔改めよ。」

という。

「パウロ、これを言つ」

と、一番あとにある。あれは正にあのヨエル書に、

「28その後われ吾^{わが}霊を一切の人に注がん 汝らの男子女子は預言せん 汝らの老^{おい}たる人は夢を見 汝らの少き人は異象を見ん」(ヨエル2・28)

「預言を賜る」という、あの預言の霊です。

● 鴻大なる福音

7 我は我が蒙^{こうむ}りたる黙示の鴻大なるによりて

「黙示」という字は「顕示」ですね。顕示の鴻大なるによりて、

高ぶることのなからん為に、

鴻大なる顕示、示し。私たちが今、賜っているのは、本当に「鴻大なる福音」です。ケチくさい福音ではない。一党、一派の信仰告白といったようなものではない。もう限りない内容で、これはどうにもなりません。宇宙的キリストの鴻大なる福音。私は「鴻大なる福音」と題して、YWCAでいつぱん語ったことがある〔註：1964/1/15キリスト教秋の講演会〕。

だから、仏教であろうと、やれヒンズー教であろうと、イスラム教であろうと、何であ



ろうと、全部包括してしまうですよ、およそ偽りでないものは。まあキリストというのは本当に大変な霊止だ。その角度をパウロは、パウロの書簡は本当に証している。大変なものだ。だから、パウロが「鴻大なる黙示」と言うけれども、彼は全く鴻大なる福音に接して、圧倒されている。「パウロ神学」とか、「組織神学」なんていつて、ただ順序立てて語れるようなものではない。

ところが、

7 我は我が蒙りたる黙示の鴻大なるによりて高ぶることのなからん為に、肉
体の一つの刺を与えらる、即ち高ぶることなからん為に我を撃つサタンの使
なり。

という。この中味は何だかわからない。学者がいろいろ想像するんだけど。多分、彼は癲癇の発作があつたのだらうという。多分、それが一番当たっているかもしれない。どうにもならんですね、「刺」といえば、あるいは、眼病であつたかもしれない。あるいは、非常にユダヤ人的なもの凄い意地っ張りの気質かもしれない。何かわからん。

●ギリギリの現実

8 われ之がために三度まで之を去らしめ給わんことを主に求めたるに、9 言い
たもう『わが恩恵なんじに足れり、わが能力は弱きうちに全うせらるればなり』

「どうも、私は弱くて……」

と。私は正直、相対的な意味で弱虫です、生まれつき。けれども、この「弱き」という言葉ではまだ足りない。「無力」です。無力となると今度は、

「無力なることを誇らん」

ということになる。ブラウニングの詩の中にあつたね、時々引用する「ラビ・ベン・エズラ」の中に。

「私が何もできないこと、これが、私が神に対して価値あるゆえんだ」

と、ブラウニングは言った。

「どうも、在ろうとして在り得ない、為そうとして為し得ない、その情けなさが神さまの前に価値あるゆえんだ」

という。我々はみんな欠点を持っています、一人ひとりよく知ってますよ。人間はみんな欠点がある。また長所もある。しかし、長所がヘタすると短所になる。短所がまた逆説的に長所になる。その長所・短所、光・闇、いろいろなそういった相対的なものがある。相対的判断はそれ自身として悪くはないけれども、その判断をもうひとつ超えた世界に入らないと、本当のことにならない。

我々は、言葉の最も深い意味において、罪に対して無力であります。「罪」というのは自我、自我心です。自我心に対して無力である。ある時は勝ちますよ。人間の現実是非常にドラ



マチックなものだから、ある一つの言葉で言い切れるものではない。

相対的に立派な人はなかなか十字架がわからない。相対的に幸福な人はなかなか福音にやっつてこない。けれども、相対的に善いだとか悪いだとか、何とかかんとかというものは、ギリギリの現実にくると、みんなそれは引っくり返ってしまう、ダメになってしまう。

ところが、ギリギリの現実には、みんな実は持っているんです、本当は。ということは、ギリギリの現実の徴は何かというと、

「我々は死に定められたる存在」

である。万人は死を逃れるわけにいかない。これは最もギリギリな現実だよ、この死というやつは。

「ああ、この生ける屍しかばねを」

という。ミルトンの中にもそういう言葉がある。

「ああ、この死の体からだより救わん者は誰ぞや」(ロマ7・24)

と、パウロが言った。あれだけ優秀な人物が、

「この死の体からだ」

と言った。ローマ書7章のあの苦しみは、救われる前ではないですよ。救われても、いや実に救われてこそ、いよいよ彼は、元来の我というものがいかにどういうものであるかということを――あつたかではないですよ――

「元来の我というものがいかにどういものであるか」

を告白しているのがローマ書7章です。

「あれは一般の人のために代言しているものだ」

なんて、学者というものは何でも頭で判断するね。

「偽善なる学者、パリサイ人よ」

と、キリストが言われるわけです。学に絶しなければ、本当の学にならないんだ。

「神の愚かはこの世の知者はずかしめる」

とパウロが言っているではないですか。神の愚者となれ、それは大賢である。大愚は大賢である。

●無力の宣言

「弱き」なんていうより、むしろ「無力」ということです。

「我わが無力を誇らん」

と。それなら、私は「アーメン」と言う。ただ「弱き」だったら、私は、これは困るね、

「わが弱きを誇らん」

では。強いも弱いもないんだよ、私は。キリストを見れば、

「もうこの無力をいけません」



と。いや「いかんせん」であるからこそ逆に、
「価値あるゆえん」
ということになる。

「お前たちを、一人びとりを本当に捕まえるぞ。破れ器だから、捕まえるぞ。行き詰まっているから捕まえる。いや、行き詰まったような顔をするな、偉そうな顔をするな、偽善だぞ」

と。ありがたいね。私は本当にこの無力の宣言ほどありがたいものはない。

「私の側はどの位か」

と測らなくてよくなってしまった。皆さん、測りたいですか――何センチだとか、何メートルだとか――いいじゃないですか。

もう何といつても、「無の神学」なんです、私は。これは躓きになるだろうね、「無の神学」と言ったら。

「一体何だ、無の神学とは!？」

と。大体、普通の神学者の100人のうち99人はわからないだろうな。

「何だ、少し東洋思想にかぶれてやがる。キリスト教を無だと言うけれども、最も凄い有ではないか」

なんて。そんな相対的な有のことを言っているのではないんです。「在る」というなら、神の他に在るものはない。パウロが言っている、

「無き者であるのに、有るような顔をするな」

と、パウロの書簡の中にはつきりとある。どこだか知っているかい？ ガラテヤ書6章3節です。

「³人もし有ること無くして自ら有りとせば、是みずから欺くなり。」(ガラテ

ヤ6・3)

と。「人は本来、無者なり」と、私なら言います。

「人は本来無者なり。その覚者はキリストなり」

と言いたい。その覚者は「南無阿弥陀仏」の「仏」だ。その仏者はキリストなりと。キリスト・イエスが本当に無者であつたから。

●十字架で聖霊を受けている世界が第三の天

いつかキリスト新聞に「『無者キリスト』を読む」といって、武藤さんが社説に書いてくれた。よつぽど驚いたとみえる。

「造語の靈妙だ」

なんていう。

「神と合一、一体の実存者、徹底的におのれを無者とし、神の無限無量の愛と生命と光



を体受して生きたキリスト、無即無量の境地、云々」

と。よく読んでくれました。

もうとにかく、こんな有り難いことはないじゃないですか。

「こつち側は何も計算しなくていい」

というんだから。

この空気と同じなんです。見えない。無なんです。そうしたら、充滿していたという。空気は見えるか。見えない。けれども、吸っている。吸っているから、空気は充滿している。空気のような、この気のような、空にして気なるもの。これは、姿は見えないが、充滿している。時にはこれは風となる。風となる。

これは本当に素晴らしい。私は空気くらい素晴らしいことを福音的に表しているものはないと思っている。空の気なんだ。天気といった方がいい。「天気」というと、すぐお天気のことを思うけれども、これは天の気なんだ。

漢字というのは素晴らしいね、漢語というのは。文字ばかりでなくて、表現としても世界最高だね、この漢字というのは。もつと漢語を勉強しなくては。

「われ無力なるときに全うせらるるなり」というんです。

「われ無力なれば、無力なるがゆえに、全うせらるるなり」

と。その「無力」ということは、その無力は、罪に対して無力である。また、何か善きことをするにも無力である。

「悪との戦いでも無力だし、善を為さんとしても無力である」

とパウロが嘆いているのがローマ書7章でしょうが。無力だから罪がのさばる。

その罪をやっつけてしまった。やっつけて、そして罪から解放して、もう全然そういった悪からは超越した現実——「第三の天」とパウロが言ったが——我々がキリストの十字架で賜って聖霊を受けている世界が既に「第三の天」なんです。これはもう天界なんです。それは特別に黙示の世界に入ることでもいいよ。けれども、

「パウロさんはそうだったが、私たちもそうになりたい」

なんて、あせることは何もない。御霊の世界に本当に入っている時は、既にこの相対界において絶対界の第三の天に居るのです。ええ。本当に…（異言）…本当にそうですよ。

●図太い魂

今日はきれいな花をたくさんくださったね。本当に心から捧げてくださった。パラダイスですね、パラダイスの花です、これはみんな。もう、皆さん、祈祷会なんて言ったって、これは天界の祈祷会だ。天界の祈祷会で、第三の天に居るんだからね。

「聖霊をくださいー！」



ではないよ。もう、

「聖霊わがうちにあり、アーメン・ハレルヤ！」

のほかにはしない。みんな何か、こっち側「十字架の手前」みたいな顔してたらダメですよ。十字架を受けとっているんですよ。十字架を受けとって、十字架という門の下をくぐったんですよ。キリストが無条件にくぐらせてくださる。

「主さま！」

と言って、十字架上の片一方の盗賊がキリストにとりすがるように言ったら、

「お前は今日、私と一緒にパラダイスだ！」

と。皆さん、今、どんな問題があるうが、課題があるうが、宿題があるうが、そんなものはいいいよ。もうひとつ乗り越えてしまつて、全部それに打ち勝ち、それを成就することができる。

「健全なる精神は健全なる肉体に宿る」

なんて何をぬかすか。本当に霊の魂は霊体を着せられていく。相対的精神を乗り越えている。

「先生は、ずいぶん元気ですね。どういう健康法ですか？」

なんて聞くから、

「何も健康法なんかないよ。私は霊界から力がくるから仕方がないんだ」

と言う。本当だもの。

情けなかったね、無教会信仰時代は。療養所へ行くと、伝染病が移るかと思って、消毒したりマスクかけたり。今は、そんなものは全然要らなくなつてしまった。こっちから流れるからね、霊が。

無教会信者が病気をただ「感謝だ」なんて言っているんだよ。キリストは片っ端から本当に救おうとして来た。

「病氣そのものを感謝せよ」

と、どこに書いてあるか。もちろんある時は、病氣において賜るところの御恵みには感謝したつていいさ。病氣そのものは何も感謝ではない。

学生はこの境地に入れば、勉強なんか楽しくてしようがなくなつてしまふ。「またか」なんて思うことはなくなつてしまふ。時間が経つのが惜しいくらい。この世の試験の及第、落第なんてものは超越してしまふ。人生のマラソン競争の勇者になる。本当ですよ。それくらいの――図太いという言葉はおかしいけれども――本当に図太い魂になってください。人間的な図太さではないよ、霊的な図太さだよ。

どうですか。パウロさんがコリント後書12章で言っているこの事態も、私はもうひとつ奥の根源現実でつかまえてしまつたら、パウロが天界で、

「そうだ。それが本当の意味で第三の天だ」

と言っている。絶対次元である。この絶対、「高き次元にたばしる御霊」と書いたでしょ。



〔註：B2「使徒らの昔を」（1979.12.9）（讃美歌359「夕陽はかくれて」の曲で）2節「聖書^{みふみ}の現実^{うつつ}は次元の高き／み霊のたばしる生命^{いのち}の世界／み霊の我が主はわが身を抱き／十字架に耐え得る力を賜う」〕

そうしたならば、何でもない世界でありながら、もの凄い世界であるということなのです。何でもない現実でありながら、もう相対的現実の中に絶対現実を開示しながら動いて行くんです、我々は。

禅宗の悟りよりもっと凄いんだよ、これ、本当に。私はいつぺん禅宗の寺へ行ってみようかな。私が本当に祈りかかっていたら、叩こうとする警策^{きようさく}は動かなくなるよ。

「何だこれは凄い野郎だな」

なんて。本当にやってみたいね。それくらいの世界ですよ、聖霊は。

●使徒の徴

だから、パウロが――そのあとをちよつと見てごらんさい。

11 われ汝^しらに強い^{おろか}られて愚^{おろか}になれり、我は汝^しらに誉めらるべかりしなり。

我は数うるに足らぬ者なれども、何事にもかの大使徒たちに劣らざりしなり。

大使徒に劣らなかつたのは、これは本当に聖霊の力で、

12 我は徴と不思議と能力^{ちから}ある業^{わざ}とを行い、

というのは、「我が行った」のではない。

「我はわがうちなる御霊によつてこんなことができるようになった」

ということ。パウロがもし自分を誇っていたら、これはもういつぺんユダヤ教に引っくり返りだ。そんな意味でパウロは言っているのではないですよ、もちろん。

大なる忍耐を用いて汝等のうちに使徒の徴^{しるし}をなせり。

はい。私たちはこの「使徒の徴」を身につける。行為において。

一時的にはキリストはその徴を与えられたんです。マタイ伝10章1節に書いてある。

「かくてイエスその十二弟子を召し、穢^{けが}れし霊を制する権威をあたえて、之を逐い出し、もろもろの病、もろもろの疾患^{わづらひ}を医^いすことを得しめ給う。」（マタイ10・1）

と。これは一時的にこの力を与えた、キリストは一時的に。これはしかし一時的現象です。しかし、これが聖霊となると、もう常住の事態になつていく。

使徒的徴が私みたなやつを通してどれくらい今まで現れたかわからないです、正直。私は清瀬の東京療養所あたりの伝道から始まってずっとやっている。あの頃はまだペニシリがないのに、肺病がストップしてしまうんだから。それで「病院から退院して」出てくる。病菌を制してしまんだよな、どういふんだか知らないけれども。固めてしまふんだよ。

まあその他いろいろある。川口愛子さんなんてのは、脊椎カリエスが治ってしまったで



はないですか。おったまげたよ、自分自身が。一晩で、一時間位だったな、あれ。私は聖書を読み祈っているうちに。

そして塚本先生に――あの人は塚本先生のお弟子だから――長い報告を書いた。切手は何枚も貼って。そうしたら、先生から、

「^{なんびと}何人にたぶらかされたか!」

という、ガラテヤ書1章のあの句をもつて反撃された。しかも『聖書知識』の扉に先生は書いた。私は、私を間接的に攻撃しているなということがわかった。

「ああいいよ、あんたがもし塚本先生の言うことが本当だと思ったら、いくらでも、それはご勝手だ。私はキリストに祈った。相手が塚本先生であろうと、絶対に、私はこれを否と言ったら、私はキリストを否むことになる。」

と、はつきり言った。だから、川口さんは、

「やっぱり、小池さんの方が本当だ」

ということになって、無教会から出てしまった。『落穂』に書いてあるね。なんとパリサイだね、無教会というのは。

「聖霊に逆らう罪はゆるされない」

というから恐いよ。

●気がつくだけの話

それで、皆さん、これから祈りに入りますが、使徒的信仰というのは、このようなキリストの御霊をじかじかに十字架の門を通して戴く世界です。絶対無条件です。

既に十字架の門が開かれていることに気がつき、既に十字架されている自分に気がつくだけです。全部、キリストはしてくださっている。救いは完了しているんだから。気がつくだけの話なんです。

「これからどうしようか?」

ではない。救いは既に成っているんです。あとは聖霊を魂が吸えばいい。全身を投入することが祈りなんです、全身をそのままぶちまけることが。もう考える世界ではない。我々の魂はそういうところに入ってこそ、本ものになるように出来ているんだから仕方がない。その他のいかなることであっても、それは本ものにならないから、みんな苦しいんです。何か欠けていると思っている。それだけ、魂は本ものを実は深層意識で願っている。誤魔化しはきかないんです、魂の世界は。いくら救われたような顔したって、救われたようなことを言ってみたって、頭で言っているうちは、百万遍言ったってどうにもならない。もう、本当に何もありません、こっちは。相対的に有るものなんか問題でない。太陽の光の前にはいかなる光も問題でない。いいですね。

こんなことをはつきり言ってくれる牧師がいるんですか、一体。それだから、皆さん、



いいですか、もう私は多言を要しない。これで本当に祈っていきましよう。終わります。

まあ特別に大きな声を出さなくていいですよ、祈りは。静かでも、沈黙でも、何でもいいんです、現象面は。問題は、内側では本当に全身を投じていることだけです。声の大きな人は大きな声だつていいし、小さな声の人は小さな声だつていいし。その人が祈っている時は、その波の中に自分を入れればいい。そういう柔軟な魂になってくださいよ。

「あんな大きな声は困るな」

なんていつてみたり、

「あんな小さな声では困るな」

なんていつてみたり。無風である、そよ風である、嵐である。

どうも始末がわるいね、この小池という人間は。そういうように成ってしまったんだから仕方がない。だから、私は楽でしようがない。何にもこだわらないからね。

今、その世界にみんな入っている。何かしかめつづらをしなくてもいいよ、肩の凝りもずっと楽にとつてね。あまり上下を付けたようなことになっていると、逆に硬化現象を起こしてしまふ。

「祈ったら肩が凝った」

なんて。

「祈ったら肩の凝りが取れました」

というのでなげば。

先に私が祈りますから。私はあとから少し按手してあげます。あとは自由に。また、あるいは名指して祈っていただくかもしれません。

● 祈り

では、祈ります。しばらく黙祷します。

キリストさま、この1980年のペンテコステを朝からだ今まで――小川兄弟が九十九里浜からも馳せつけて来ました。その他、東西南北から、信州からは小海君やまた横山さんがやって来ました――このような小さいけれども、しかし、

「聖国を賜うは御意である」

と、あなたはおっしゃってくださった。

このペンテコステは、過越の祝い、即ちイスラエルがエジプトから贖い出された、その祝いから50日を経った、その時にあなたは40日間現れ、そして10日間の祈りのあとで、俄然、天界から嵐の如く、炎の如く聖霊を臨ましめ、集まっている人たちの上にまた中に、御霊が本当に与えられ、キリスト教会の歴史はそこにはつきりと始まったのでした。

「我は始なり終なり」

との、この聖霊の事態は、あなたの聖国の来るまで、本当に非連続の連続として常に新た



に進んで行くはずのものです。今日はそのひとつの大事な一角をこの一日において賜り、聖名を讃え奉ります。

どのように今、キリスト教界があろうとも、私たちは――使徒たちが本当に新しく真に立たしめられたのは、この聖霊によつてでありました。本当に十字架がはつきりと裏付けられ、十字架・聖霊の事態を、また十字架・復活・聖霊の事態をパウロはどのように繰り返し繰り返し打ち込むように語っております――どうぞ、私たちもまた、パウロのこの書簡を読むこと、使徒行伝を読むこと、聖書を読むことが直ちに祈りであり――考えることも研究することでもありません――聖書を身読することが直ちに祈りであり、あなたの世界に入ること、いよいよ日々の生活において体験し、体現していくことができますように。この日を一つの境として、この兄弟姉妹たちが顯然とその実践を、その実存を明日から進めて行くことができますことを信じて、感謝いたします。

たくさん読むことはありません。本当に打ち込んで、自分を投げ込んで読むことが直ちに祈りであり、感謝いたします。本当に、

「わが言は霊なり生命なり」

とのキリストの御言葉が直ちに現実となりますから、ありがとうございます……（異言）……実に第三の天が既にこの中に天降りしていることを信じて感謝いたします。この兄弟姉妹たちと共に、

「ああ、パウロのこの現実には直ちに我々の現実であった」

と、聖名を讃え奉ります……（異言）……主さま、どうぞ、この兄弟姉妹たちが、

「ああ、こんな事態であったか。何を自分は考えていたか」

と、ただ俄然、あなたの中に投入し、そして祈り込みまた祈り込んで、あと凱歌を上げて散ずることができますことを信じて感謝いたします。

今、心からの感謝と讃美、願ひ、主イエス・キリストの聖名により捧げ奉る。アーメン。

各自、御自分の言葉で、沈黙でも何でもいいです、キリストの中に祈り込んでください。

……どしどし声を出して構わない。……

最後に私が静かに祈ります。それで終わります。

昔在し、今在り給ひ、のち必ず来り給うところの主さま。あなたを戴き、

「われ汝のうちに、汝わがうちに。われキリストと共に十字架せられたり。我生く、されど我にあらず。汝わがうちに在りて生き給うなり」

と。パウロと共に本当に私たちは聖書を身読し、そして直ちにそれが祈りの現実として読んでいくことができますように。このことを日々必ず実行していくことをこれから誓います。

主さま、どうぞ、そのようにしてこの兄弟姉妹たちを実に新しき霊止に、いよいよ日に日に新たにしてください。そして、苦しめる者、悩める者、生き詰まっている者、また傲



慢なる者、いろんなひとがいますが、そこに本当に自由自在に福音の權威をもって、神さま、これに耐えせしめ、福音の愛をもってこれに耐えせしめ、自在に実存せしめ給わんことを切に願ひ奉る。

「汝らはわが証人なり」

と、そのような自在なる証人としていよいよお鍛えくださらんことを願ひ奉る。感謝いたします。聖名を讃えます。

京都、大阪のペンテコステも今日はあなたが圧倒的な恵みをもって、力をもって、彼らを導き恵んでくださったことを信じて、聖名を讃え奉ります。やがて、6月7日、8日はかしこに相集まって、この召団の大会をもつて集会と公演会を展開していきたく存じておりますが、できるだけこれに参加することができまうように、御導きください〔註：京都春期特集（1980/6/7～8）、①「足を洗う」、②「ガラテヤ書の奥義」、③「聖書はドラマである」〕。今、心からの感謝と讃美、祈り、兄弟姉妹たちの全身のそれと共に聖名により捧げ奉る。アーメン。それでは、聖化⁶²³番「いつかはしらねど」を歌いましょう。3番はぬかします。

●（参考）『無者キリスト』を読む（キリスト新聞の社説 1976年2月7日 武藤富雄）

「小池辰雄著『無者キリスト』を精読した。その書評はすでに本紙に掲載されたところであるから、くわしいことを省き、本書の内容のもつ読者への迫力につき、一、二、三の点を紹介しよう。

信仰に関する話は、話者の人格と霊的な悟りとか、以心伝心で聴者に通ずるものであるから、これを活字を通して、著者の信仰的境地が、時に脈々と、時にひしひしと読者に迫ってくる。ちょうどパウロの書簡を読むと彼の信仰と思想とが二千年の時の経過を超越して迫ってくるのに似ている。

『無者キリスト』は四福音書への忠実を保ちつつキリストを描いた作品である。福音書に忠実だと、叙述は平板になり、聖書の記録を綴り合わせてこれをなぞったものになる。そこで、内容を魅力あらしめようとすれば、今をときめく流行作家のキリスト物のように外道（げどう）に墮する。ところが『無者キリスト』において、著者は福音書通りの事実を記述しつつ、キリストの意識の深層を洞察し、その実存を究めつくし、

「キリストの言行を本体の現象面として受け、これを媒介として本体を体受している」のである。

「神と合一、一体の実存者、徹底的におのれを無者とし、神の無限無量の愛と生命と光を体受して生きたキリスト、無即無量の境地、そこに贖罪死があり、そこに霊体をもつて活現、復活するキリストがある」

というような叙述が福音書にあるキリストの実存や事件とともに現われてくるのが本書の特徴であり、読者の心霊に迫る力をもつのは、こうしたところにある。



日本語で書かれたキリスト伝として最高の評価を与うべき書の一つであろう。

造語の靈妙も一つ、興味が深いのは著者の造語力である。宗教的な悟り、靈的な深みを表現するには、既存のことばだけでは足りない。トマス・カーライルが言語を酷使して深遠な思想を表わしたように、『無者キリスト』の著者は、慣用されていないことばを創作することにより、キリストの内面、否、実存への悟入と、読者へのこれが伝達を可能ならしめている。その例を示せば次の通りである。

「旧約、新約を貫いて身読・靈読せしめるものはキリストの靈である」

「みたまの實在」

「キリストのふところへの投身」

「タリタ、クミ！ われらは倒れくずおれたとき、この言を靈聴して、靈性によりみがえつて邁進すべきである」

「ルカはイエスの十字架の受難、復活、昇天の大ドラマをエクソードスと表現したものだと思う。これは逝去とか最後ではなくて、『出現世』である」

「聖書には次元の異なる激しい事象がたくさん記されてある……、いわゆる聖書研究などでは何のかのと議論しても始まらない。研究というなら、祈り心をもって靈察、靈知する角度をもつべしである。自分の中に靈震が起きる」

「ナザレのイエスがみ霊のキリストとして、信する者の中に内住する実を。ペテロはじめ、使徒たち、その他いかなる人においても実証した。彼らの中にみ霊の実が止ま^{とど}まって、本当の靈止^{ひと}となった」

「福音の福音たるはこの聖霊を受けないでは決してつかめない。百聞一見に如かずというように、百聞一験に如かずである」

「信徒の集まりたるエクレシア（教団）――原語はむしろ召団――は聖霊の降臨を受けて始めてエクレシアの名に価するのである」

「復活のキリストがダマス^コ途上のパウロに電撃的に現われ、彼を靈撃し照破した」

「彼はキリストのみ霊の愛の力に圧倒されて、福音を言とカリスマ的なわざとを以て身証したのである」

内に溢れる靈的たまものを、少ないことばで表現して、読者、聴者に伝えることこそ、信仰的著作や説教の妙諦である。現代の教会は言語の修飾をもつて、靈的内容の貧困さを補おうとする傾向がないであろうか。この書に比較して、このことを感ずる。ただし著者が無教会の学者であるためか、エクレシア（教会）への靈察が足りないことは本書の「欠け」であろう。これが著者の靈知によって将来補われ、現代の教会に靈震を起こしてもらいたいものである。」

